

ともしび

藤村の女川柳句集



著者近影





篠山支部10周年記念川柳大会 昭和34年



生々庵先生宅での婦人友の会 昭和35年

お立台天皇様が瞳に浮かぶ  
ゞ女



十和田湖よみな酒になれ旅人へ 路郎

青森県川柳大会に参加 昭和三十七年

橘高薫風氏と路郎先生に随行して

大町桂月墓前にて



大萬川柳会総会



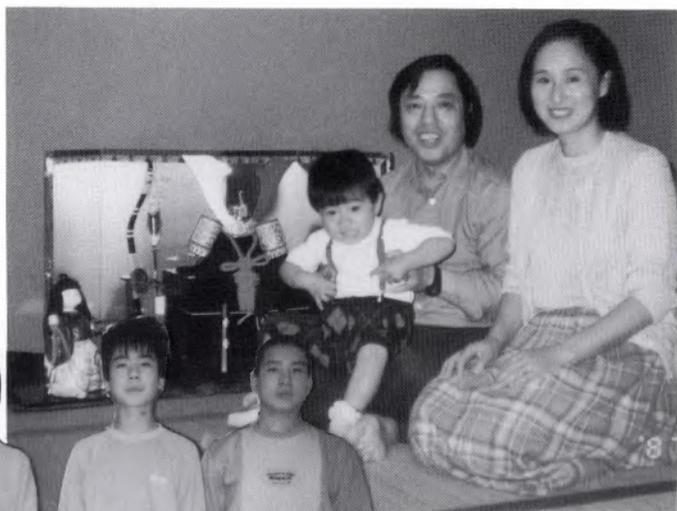
不朽洞会総会（自安寺）



長女一家



次女一家



長男一家



三女一家

次男一家



子守唄うたえば故郷近くなる  
メ女



著者の生家



女手にあと一息の子の育ち  
メ女

昭和33年当時の家族

もくじ

序文

西尾 栞……2

女お母さん

黒川 紫香……3

二十五年前の旅

橘高 薫風……5

作品

父の座 母の櫛……10

母鳥 子鳥……30

花に風……60

ふるさと……92

船出……134

あとがき

藤村 女

## 序 文

西 尾 棨

メ女さんが手書きの句集を出すことになった。誠によるこばしいことである。昭和三十二年に川柳に手を染めて同年、川柳雑誌に婦人友の会が出来るや入会、メ女の雅号を路郎先生よりもらって鋭意、川柳に精進された。青森県東奥日報社の十周年大会に、路郎先生に薫風氏と随行して帰途、十和田湖並びに東京都を廻り、東京柳人と会われて視野を広められて一層、柳境の進歩を見せられた。

女手にあと一息の子の育ち

という句の示す通り、二男三女の五人を育てられた根性は、単なる根性だけではなく、所謂、女としての意地をもっていられたからであろう。

風雪に耐えた塩つぼ母が抱く

悲しみに耐えるハンカチ握りしめ

離婚したわけを他人は聞きたがり

このように世間の眼から白く見られた哀しみにも耐えて敢然と生きてこられたが、句は大変やさしく温かい。

置手紙みかんが一つ乗せてある

振り向けば同じ歩巾で来た母娘

別れても風の噂を気にかける

本来に来てネと道順書いてくれ

逆境にあつてもくじけない、人なつこい句の生まれるのは、ゞ女さんのお里が中国勝山の塀を巡らした旧家で育つた環境のせいであろう。先年、たった一人のお母さんは九十六歳まで生きておられた。

故郷の庭久方の竹箒

紳士録に父の名前があつた過去

女流柳人の序文を初めて書いたが、之からも亦、女流作家の句集の沢山現われることを切望して筆を擱く。

## ゞ女お母さん

黒川紫香

私がゞ女さんを「お母さん」「お母さん」と呼ぶのも、長いお付き合いから来る親しさであるし、さりげなく甘えられるからかも知れない。

そのメ女さんが今度、手書きの句集を出されるといふ。戦前、戦後いろいろな苦しみと育児に苦勞をされて来ただけに、メ女さんの句には芯の強い生活の匂いが漂っている。私の親友若柳潮花君がお世話していた川柳雑誌時代、麻生葭乃先生を師として発足した婦人友の会のメンバーで、現在、数少なくて残って居られる一人である。その生活の闘いの中で、麻生路郎先生のお伴で橘高薫風さんと青森から東北を巡遊されたことが一番の思い出となっているのではないかと考える。

内の子を叱ると友達皆かえり

わが影に重なる影は五人の子

齒の痛む子へ家中が起こされる

一度、メ女さんの実家をバスの中から垣間見たことがある。旧家そのものという構えで、ここにメ女さんがいつも話されたお母さんが住んで居られた。そのお母さんも先年、亡くなられたが、自分が年寄っても老母を慕う思いがメ女さんの句にいくつか出ている。

いつ来ても板の間光って母達者

切手忘れた母の便りを読み返し

孝行をちよっぴりさせて母が逝く

ともあれ、メ女さんの心はまだ若い。遠くの句会へも努力して出かけられる。誘えばいつでも従いて来て貰えるメ女さんである。特に、故郷である中国から山陰地方にかけて知己も多いし、慕う人も沢山居られる。昨年、見知らぬ熊本へ同行した時も、土地の女性川柳家から「メ女さんはお母さんのような

人」と私に便りを寄せられた。

新幹線はっしはっしと灯り飛ぶ

のような勢いのある句で、いつまでも川柳塔のお母さんで居て欲しいと思う。

句集にも母が滲んでまだ達者 紫 香

## 二十五年前の旅

橘 高 薫 風

中国山脈の山褰に囲まれた岡山県北辺りの女性は、昔から美貌美声の持主、男勝りの働き者で知られているが、これは勝山を故郷に持つ藤村メ女さんにそのまま当て嵌まる。それに、この地方には長寿の人が多い。メ女さんの句の、嚴父を九十二歳で亡くした時の

振り向けば老母ひとり佇つ野辺送り

また、ご母堂を九十六歳で見送った時の

孝行をちよつぱりさせて母が逝く

などは、感銘深いものである。

メ女さんのお付き合いは、かれこれ三十年にもなろうか。中でも印象に残るのは、麻生路郎先生に

随行して東北から関東への旅を持ったことである。

昭和三十七年七月、東奥日報社主催の青森県川柳大会に、初めて関西から招かれた路郎先生に、*メ*女さんと私がお供をした。川柳界の、殊に京阪神を出ての初体験は、接するものすべてが新鮮で、ことごとく驚きの目を見張らせたものだった。工藤甲吉さんとお会いしたのもその時が最初で、

半白のオールバックに知情意が

と私は詠んだ。氏は、東奥日報の編集次長の働き盛りであった。今は亡き工藤安亭氏をまじえ、浅虫の社の寮で歓待を受けた。寮番の老夫婦手料理の味も今なお忘れ難い。大会の路郎先生の選で、私の句

弱肉強食鱈皮の鞆持ち

が天位に選ばれたのには感激したが、後年、再度青森を訪ねた時、これを八百長呼ばわりされたことがあって、大会の選というものを考えさせられたことである。

路郎先生は、十和田湖で、

十和田湖よみな酒になれ旅人へ

の一句をなし、湖畔で楽焼に興じられた。八甲田山雪中行軍の犠牲者の銅像、水芭蕉群生地 of 爽やかなたたずまい、酸ヶ湯温泉の湯治場風景、蕨温泉と大町桂月の墓、奥入瀬渓谷等々、今なお天然色で鮮やかに走馬灯を巡らせることが出来る。

*メ*女さんは、その間もっぱら路郎先生のホステス役であった。青森中心街の町角で、膝をかがめ、まるで街の様子を観察するかのようであった先生が、急に顔面蒼白とられた。

メ女さんは、路郎先生持葉の日本丸を買いに薬局へ走ったり、てんやわんやの一幕もあった。

私たち一行は、帰途、仙台と東京に寄った。仙台までの寝台車は冷房が故障していて暑かった。車掌が、冷房の効いた車輛への移行をうながしたが、先生は、

「これ位が丁度よろしい」

と動こうとされなかったのには、私たち二人は一言も無かった。仙台駅では、後藤閑人、菅原一字、赤井滯子お三方の出迎えを受け、昼食を共にした。

東京では豪華な顔ぶれの歓待を受けた。上野駅には路郎門の山根白星氏が待ちうけておられた。

鏡台を並べてみんな不倅せ

の作者である。確か、阿部佐保蘭氏や漫画家の種瓜平氏も一緒だったと思う。新橋のレストランでは、東都川柳界の大物たちが顔を揃えた。川上三太郎、村田周魚、富士野鞍馬、塚越迷亭、高須啞三味、奥津啓一朗の諸氏、それに、現在、日本川柳協会理事長の藤島茶六氏。私にとって大先生ばかり。顔馴染みは、鞍馬さんだけであった。

この時以来、東西川柳人の交歓が頻繁に持たれるようになり、メ女さんにもご協力を得て、私は川柳界の交流に微力を致すこととなった。

この旅の終りに、路郎先生は、次の便りを甲吉さん宛に出しておられて、メ女さんの先生一家への溶け込みぶりをうかがわせる。

暑中御伺

その後失礼。廿七日（この日東京へ台風来の電話がありました）午後十時大阪駅、十一時前に無事帰宅、それから八日間の旅の留守中の柳務山積、急を要するものの処置に没頭して居ります。貴下も又同様、私のために多くの時間を割いて下さったので、おそらく忙しくされていられることと恐察して居ります。

八月号、印刷所の都合でまだ出さず閉口しています。七月廿八日附夕刊紙の記事、「川柳一ト筋」要領よく掲載して下さったので結構でした。

東京の歓迎会で、三太郎のからだが予想以上にわるかったので案じています。

こん度の青森の旅はうれしいうれしい限りでした。貴下の絶大な好意による賜物だと思つています。有難う。帰阪してから薫風子の句集も印刷屋へ放り込みました。今夜はメ女がやって来ました。彼女もいい思い出の旅をしたとよろこんでいます。風呂に入り夕食を共にして帰って行きました。

一九六二・八・五

麻生 路郎

工藤甲吉様

玉机下

路郎先生は、私に

「君はあどけない顔をしてよく眠るなあ」と述懐されたが、メ女さんには、どのような感想を述べられたか、それは聞いていない。

父の座  
母の櫛



Nagisa

礎に正しい杭を父が打つ

いつ来ても板の面光そ母達者

居眠りしている煙たい父が居る

一喝で後を残さぬ父の愛

灰皿をよごして父が家に居る

なんとなく父が好<sub>キ</sub>に義礼智信

バランスをくずす<sub>が</sub>ぬ父の奴<sub>レ</sub>風

父の座に父<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>く座敷<sub>レ</sub>広<sub>レ</sub>う見え

父一人欠けてえなにない部屋

紳士録に父の名前があつた過去

子よ父の仮面は二度と振り向くな

編みかえそあみかえそ着る母達者

苜の花こぼさじと掃く母米寿

ふり返る母は小さく駅に佇つ

子蒲団よふくりんで母たのし

予報どうあろうと母は傘を持ち

靴音で父の疲れがわかる母

糸ぐずを集めて母は夢を編む

樂も苦も流して母が運ぶ針

切手忘れた母の便りを読み返し

樂させてあげたい母がよしく勤く

嫁がせて母に豊口の日が続く

ハンカチを振る母ホームが遠ざかる

主義主張言えない母の白い旗

風雪に耐えた塩っぱ母が抱く

追伸の母の情に涙湧く

母にだけ切れる鉄の鈴が鳴る

針持てば人に負けない母米寿

母さんが一番小さい影法師

手放して喜ぶ母を飽びしく見

風花に老母と連れ立つ宵我

淋しさに耐えてる老母の髪をすく

花冷えに老母ひとりの春炬燵

薄氷踏んで母の百度石

振り向けば老母不佇つ野辺送り

白衿の母を見直す悲しい日

ちぎり絵をつなげば母の影となる

びんつけの香がしみた母の櫛

ふるさとの月がかたむき  
母が逝く

孝行をちよびりさせて  
母が逝く

訃報しきり母の終章ふと思う



輝いた星を私の母と呼ぶ

アルバムの母が笑つて話しかけ

母 惚ぶ 涙れて 溢れる 涙つぼ

泣く時は臉に亡母の聲がする

ふるふるとに母あり彼岸の花を送る

母の志の雨はむらむらいろに降る

鈴の音は母のやさしい郷音もつ

針箱へ母の思いでためて老い

少しずつと母に似てきたほろ苦さく

母の部屋まだものさうがまきっている

経本をめぐると父母の音がする

四ううに母の情が住み

母鳥

子鳥



母の目が時には女として炎える

無位無冠その礎に母がいる

実権を妻が握っている疲れ

回り続けて少し疲れた母の独楽

初産はどちりたなるとも白揃え

振り向けば同じ帯で来た母娘

泥舟とわかって乗る子の頼み

出世した我が子へ何かうちとけず

別れても風の噂と氣にかけろ

女ひとり静かに沈む酒の量

背を向けた握り拳が泣いている

古稀過ぎて私がも鬼の耳がほー

喜寿傘寿自分がで生きる顔を持ち

泣き笑いどり返しつゝ喜寿迎え

ある日ふと世に欲し、鬼の面

失つた愛の痛みの爪をきる

悲しみに耐えるハンカチ握りしめ

他人にはなり切らぬ血がまたうずく

米櫃に米あり今日の心富む

ハンガーへ今日の疲れが吊るさるる

エプロンがやつとはすせたしまい風呂

初めてのムーム鏡の前に行ち

やりくりは子に親かせぬ母の独樂

世相どうあれ今日の足元しかと踏む

流氷星都会へ消えた娘を案じ

恵まれた老後は過去を振り向かず

まだ独身かと言憎いひと

離婚したわけを他人は聞きたがり

ご苦勞の程はと口先だけの他人

城崩けた母子に哀しいわらべ唄

和解した朝の化粧がよく伸びる

靴音のそのまま凍る帰り道

考えがひよいとまとまる風呂の中

内の子を比べると友達比白かえり

孫の画く太陽みんな笑つてる

頭から怒鳴り自分を負けている

歯の痛む子へ家中が起こされる

留守中に娘が来た置き土産

母と子の童話涼しい風があり

師先祖の一字を貰う名を選び

悲しからずや私が産んだ蛙の子

柳は縁目高を知らぬ子と歩く

わが影に重なる影は五人の子

泣き虫を四五人囲む一年生

菡ブランシの柄の七色も子沢山

女手にあとい息の子の育ち

すぐはげる嘘でゆかいな子の話

それぞれの望みを持って子は育ち

夫人の家族それぞれ餅が焼け

うぶ声は秤の上で天を蹴り

知らぬ間に我が家のルル孫決める

満ち足りた顔かな孫を抱く夫婦

したいだけいたすうまして孫昼寝

孫の武器やさしさからは逃げられぬ

孫が捨て姑が拾うて揉めている

元旦の声どの孫もいい返事

へソクリをハツどきにする孫の数

天皇はなぜえらいのと孫が聞く

私の指が窓に書く孤独

大げさな噂に耐える細い眉

月光に私への道があり

松のぬ明治が生きている我が家

元旦だけは折目正しい膳につき

ジルバマンボ習う主は古稀の人

鍵っ子の心に冷たい秋の雨

泣かぬ子の根性広場の石が知る

鍵っ子の背に淋しい雨が降る

子が泣いたとこそ内職お茶にする

わりきろて終えは苦勞などおかし

青い乳房が白うてならぬ教え唄

手鏡に心の愚心かう覗かれる

バスヤル巻イヤ受話器に走らされ

風流な趣味と皮肉な顔がほめ

裏返す枕に長い夜がある

石段の数がぞろぞろする子のジャンケン

一息に飲む故郷の水甘し

命溢れてうぶ声天まつく

ランドセル花のトシネル手をつなぎ

パパの夢天まで届け肩車

故郷の庭久方の竹箒

老夫婦糸巾が拵う夜店の灯

隠し芸家では見せられない踊り

星二つ流れていとしいひとと思う

コーヒーの底に沈んでゆく自由

赤とんぼの早さで秋の彩になる

花  
に  
風



Nagisa

一と粒ずら毎つぶして反省す

花ひらく雨はやさしい音で降る

かすみ草どんな花とも添寝する

花びらを風にまかせて春走る

梅林のほどよいところに甘酒屋

少年の草笛春の野を馳ける

雨の日の花の鼓動が遠くなる

散る花へ耳をすませば音があり

鐘の音に花散りそうなお堀端

風見雞風のない日の雲といふ

忘れたい過去に他人は触れたがり

歳月がいつか耐える事に慣れ

今だから笑つて云える離婚談

振り向いた後姿はもう他人

割り切った過去で別れの握手する

茜雲ふつと逢いた顔が浮く

岐路に立つ心仏向へ灯を点す

つますいた石に心を覗かぬる

乾杯のグラスに青い星こぼれ

炎え尽きて行くあてのない流氷星

星祭り之母の童話が胸に棲む

俵せささがし疲れた月見草

笹舟に少女は恋を知りそめぬ

夕鶴の糸はべっとり濡れている

女ふと菊の白さがねたまーい

菊日和お隣りさへも留守うーい

忘れたい思ひ出ばかり流水星

虫鳴こそ人ほつちの夜が更ける

もう逢えぬひとが残した手の温み

なだらかな女の肩に秋匂う

落葉して心に迫る風も冬

もう泣かぬ女が白足袋はいている

自由自答自分の老をたしかめる

浮世絵の指にきれる嘘をみる

下町の育ち根性と意地を持ち

平凡な生活余生に逆らわず

南運の虎が揺れてる新妻の酔い

喜びは今朝も、パツチリ眼が覚める

角砂糖やつくり沈みさくらやきぬ

その夜の心がうつる影法師

追憶の涙はみんな真珠色

目標を一番高い木に吊るす

正確な時間の中にある平和

妻の船で流水に乗っけている平和

定年のそこから妻が強くなリ

向いから欠伸がうつる終電車

葉牡丹の床に座れば春めいて

吊しのぶお前も春を待っている

ヤジロベエ春のバランス聞き分ける

如月の夢あたらめるシララメン

陽炎の中に小さな春を見る

心うろちポトリと落ちた紅椿

雨だれをじつと数えたりる孤独

雨垂れといて雨垂れの面白さ

今日雨く花を蜜蜂知つて来る

ごうせいな水引だけの記念品

半分は諦めていた児が生れ

何も彼も忘れて広い空の青

雪柳春の音符がドレミファソ

便り書く。ペンの先から届く春

風に舞う噂話も春にとけ

洗濯のリズムに女の唄がある

竹馬に乗つてる方が女の子

逃げ道をちやんと残して叱るママ

眼鏡はずすと人生の裏が見え

出発の時間は南を見送らず

目も口も重、紙人形の笑い顔

久々の慶事九谷の鉢が出る

歓迎のキツも嬉しく頬に受け

介抱をちよせて飼育をこころみる

髪染めて女死ぬまで夢がある

悲しみを埋める話なり拾う

満願へ続く一歩の百度石

薄氷春のリズムとなつてとけ

水色に少女の恋はすけている

慕情しきり風の便りと待ちあびる

子の夢の序曲矢車風に鳴り

苺つぶす女の嘘が美しい

倅せさきうがし疲れた夏帽子

兄ちゃんと呼んで遠慮のない夫婦

温かい友情に逢う落ちこぼれ

公園でひとり石蹴る影が伸び

哀しみが哀しくたまる影法師

ある時の影が味方の顔とする

指の先から女になつて来る兆し

花便りそえて新居の通知来る

沈丁花の香りの中の立話

童唄子の輪の中に蝶舞心

こゝだけは此系の雨あやめさく

緩やかな流れの底にあつた渦

片意地を張つて動かぬ青リング

ふるさと



Naqisa

ふるさとのふ川唱歌のまゝ流れ

おしゃべりな風が運んで来た噂

錢湯に貧富の差なき湯が溢れ

コシバクト用いて女にある嫉妬

手を握り返して女謎を掛け

手ぶらでは帰せぬ姑に見栄がある

お酒酌ぐボーズは昔出てたひと

表彰に生き生き手話の手が踊る

移民船はるかな夢を乗せて発ち

天辺で冬を病んでる木守柿

冬の木にリンゴが一つ病んでいる

決意した歩中だんだんおとろがち

鍵穴の視野から噂が走り出す

喝采の末練が耳の底にある

見栄があつて少し大きな石を積む

耐えて来た女に喜寿の陽が昇る

偉な鯉は皇居の池に住み

比する方も泣いてる影法師

すきのない人と話してくたびれる

喝采のない善人のちびた靴

噂さへると女は強くなる

回顧録余白に女傑の鈴を聞く

商魂がさらに女傑を盛り上げる

酒たばこ女傑に女が遠くなる

吊橋をトントン馳ける山育ち

脇役で一生耐えた芸の虫

むらさきのさくらやき桔梗雨路にぬれ

白足袋をはいて女に秋の風

ひびのある湯呑に私が裁かれる

もういゝか誰も答えぬ冬の坂

野辺送り根雪の道へ椿咲く

此の窓も入試の子がいる灯が消えず

夜の化粧落すとお乳沸そくる

坂道のドラマ峠に埋めておく

自慢話きつと淋しいお人だらう

酒と一緒に流れ続ける夜の蝶

針箱の底で秘密は風化する

戦略の一つに妻がダイヤを買う

純情な方ねと女不服ぞう

一滴も飲めぬ女のかくし芸

宴会の一人音痴のでかい声

捨犬の眠る広場に風の私語

浴衣着て出れば一味違う風

悲しからずや正直者のちびた靴

背信のドラマへ泣ける君でせう

あの人も待たされていゝ時計見る

アカデミーに女翔びたくたむろする

大坂の隅で生きてるお人好し

双肌を脱ぐと太鼓の音がかわる

女には過ぎた気骨を惜しがられ

打ち消せばますます大きくなる噂

ほんとうに来てネと道順書いそくれ

余りいゝ月が私を歩かせる

小雨降る外人墓地の曼珠沙華

萩白く咲いて女がひとり住む

団地静かに秋の夕陽が落ちてゆき

秋はむらさききの情に流される

砂に書く恋の返事は波が消す

童話読むとたつみかんが甘くなる

よく喋るオウムが近所に越して来る

十二月の風に追われふところ手

水車冬には淋し過ぎる音

土塀から昔の音が聞こえそう

意見対立 灰皿煙ってる

裏返す言葉をつ用意する

置手紙みかんが一つ乗せてある

薄氷樂しく踏んでるランドセル

薄氷金魚も鮎も動かない

テレビドラマの女不貞で美しい

美しく嫉妬している三面鏡

鍵穴の視野で噂が風トのる

平凡に生きていたい世間のむつかしさ

忘れたい傷に他人は触れたがり

すべからせたま言葉正体観かゝる

酔いどれがうつろに笑う終電車

鈍感な男が積んでいる積木

どちらへもあつさり転ぶ軽い首

砂時計 忘れた筈の過去が見え

表彰の母のとい子のたくましさ

廻り椅子までにはらかな固い椅子

片腕は圓に捧げた袖がたれ

人間に完成はない恥を書くる

一枚の紙に人間あやつらぬ

不景氣な顔が売つてる室くじ

音もなく枯木を飾る雪が降る

日旺だから降る雪が楽しい

木枯しへ長い私の逃去記

此のひとにも孤独ころろと覗かせず

決意した筆がすらすら走り出す

入道雲職を求めらる目に高い

事實には勝てず重たい口ひらく

順不同不満の顔が隅に座す

嫉妬深い女の道の土埃リ

筋書はちやんと判つてゐる勝利

名内の過去が重荷となる余生

末席はもうお茶漬を食べている

握りめのどれもが明日の個性持つ

嘘一つ凶星つかれた慌てよう

馬鹿になりなさいと理性がさうやく

はらはらと流す涙に嘘をみる

生きている夏が去っている春が来た

どよめきのその中心にいる自信

アトバイス重視して不覚の矢を受ける

一山百糸のトマト秋の陽にならぶ

あつて無いニルバーニートと言うるル

捨てきれぬ見栄が世相の波ふれ

雑魚も入水ともかく揃う頭数

山に生<sup>キ</sup>雲の棧嫌に油断せず

仕事着の似合<sup>う</sup>男で頼<sup>め</sup>しい

ポケットに男はみんな嘘<sup>を</sup>持ち

指みんな握ると武器になる拳

靴の踵にくせと個性を秘めて老い

踵返した時から夜叉になる女

信号を中つくり待った松葉杖

住所不定土工の首に陽が強い

出稼ぎの金が届いた秋祭り

人の非を口ににした夜の寒い雨

百度石古い女が積む願い

酒飲めて酔えば私も楽しから

船

出



Nagisa

新幹線はっしはっしと灯り飛ぶ

京舞妓蛇の目が絵になる雨もどろ

ふるさととの駅から温い風になる

子守唄うたえば故郷近くなる

数え唄ゆつくり故郷白ゆせる

一人だけまだハンカチを振る船出

ホステスが英語を喋る港の灯

飛ぶ灯りつらつらが旅の色

可も不可もなく混浴へさうつと入り

山彦へ精一杯の声を上げ

たらい舟恋の女が渡る海

馱鈴の音色にはれた隠岐土産

黒木御所小雨の中で聞く哀史

憧れの処女峯めぐりサイル解く

軒低い白壁続く城下町

明暗を偲ぶ城下の世の移り

白い壁続いて落書したくなる

古寺めぐる女に煙る京の雨

鐘だけは平和に鳴つてる京の寺

どの塔も歴史の白いしてる寺

此系の袈裟沙衣から覗く嵯峨の秋

北山の杉に自由のないポーズ

終電車星がきらいたいな甲山

## あとがき

自分の手でひと文字ひと文字と書きあげ、子供や孫達にプレゼントするつもりで書きかけた句が、まとまったら僕達で句集にして上げるよと言われ、いっそのこと「喜寿の記念に」皆に渡しては、と長男の強いすすめもあって、迷いながらの処女句集の運びとなりました。

私のありのままの姿を、今までに活字になった句を拾い、他の句集に載せた句はなるべくはずして整理をはじめましたが、これと言う句も少なく、その中より千句程を書き抜いて紫香様と水客様に、お手数を掛け、どうにか三百句程を拾いあつめていただきました。身内だけに贈るつもりで、子供達の家族の写真も入れて百冊でもと長男の手もとに渡してありましたのが、百も二百もいっしょだからいつそ古い柳人達にも読んでいただいたらどうかと先生方の薦めもあって、皆様に見ていただくことにしました。

現在、川柳塔では路郎賞がありますが、それを戴いても、路郎先生をご存知ない方も多く、いっそ先生のお写真をものせてはということになり、川柳雑誌の頃、「婦人友の会」を指導して下さった頃の路郎先生ご夫妻のお元氣なお姿を共に掲載させていただきました。

もう三十年になりますか？ 思い出のある方はなつかしいのではないかと思います。

句集出版の編集を全部おまかせして大変お世話になり、この句集の出来た事は、正坊様に何と云うてお礼を申し上げてよいやら、柳友なればこそと懸命のご厚志に心からお礼申し上げます。ありがとうございます。

また、栗先生初め紫香様、薫風様にはご繁忙中にも拘りませず、身にあまる序文を寄せていただき、まことにありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

扉の絵カットはおばあちゃんへと孫が描いてくれました。写真は長女の作品です。

恵まれた老後は過去を振り向かず

日日好日空の青さへ聞いて見る

藤村 女

## 略 歴

明治45年5月23日 岡山県で出生

昭和9年に結婚と同時に麻生路郎

夫妻と交際

昭和30年に不朽洞会員となる

昭和32年に婦人友の会に入会

昭和40年に川柳塔同人となり、

現在に至る。川柳塔社参事

川柳句集 **ともしび** 頒価一、五〇〇円

昭和六十二年十二月十二日発行

著 者 藤 村 夔 女

住 所 〒 565 吹田市佐井寺四丁目八三一三

ユニライフ二〇五号

電 話 (〇六) 三三〇一三三二〇二

発 行 所 川 柳 塔 社

〒 545 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第二ビル二〇二号

電 話 (〇六) 六二九一六九一四